

2022.1.10

Report from AKATSUKA PARK

赤塚公園武蔵野台地崖線植物モニタリング活動

「雪にも負けず・・・」生きている野草 もしかしたら野草には体温があるのかも



昨年末の12/20のレポートでは霜が降りてカナムグラなどが枯れてしまったことをレポートしました。今年に入って1/6の降雪は予報以上の降り方だったので若芽を伸ばしている野草はみんな枯れてしまったかと心配でした。雪の翌々日1/8に赤塚公園に行ってみたら、ため池公園の郷土資料館裏はまだ雪が残っています（左の写真）。しかし、白い雪の中でもぽつりぽつりと黒く見えるところに注目してください。

これを近寄って見ると下の2枚。あれ！？草が顔をのぞかせているではないですか！



写真右の上はオヤブジラミ。下の真ん中で葉を広げているのはムラサキケマンのようです。どうして草が生えているところは雪が解けているのでしょうか？

例えば、八百屋さんで買ってきた青菜を冷蔵庫の冷凍室に入れると青い葉はたちまち黒ずんできて死んでしまいます。植物は根から幹（または茎）を通して葉の先まで水分が絶えず流れていて、それが植物を生きた状態に保っているのですが、冷凍庫などで温度が零度以下になって水分が凍ってしまうと、この流れが止まってしまう、植物は死んでしまうわけです。ところが、写真のように草原の草は雪が積もっても死んでいません。まるで、草が暖かい体温を持っているようです。

おそらく、草の根が伸びている土の中は凍っていないのでしょうか。それに、雪が積もった葉とその下の地面との間の空間は気温が零度以下にならないですんでいるのでしょうか。だから、根から吸い上げられる水分も凍らなくて済むから、草が死なないのだと思います。大雪で何日も根雪が残る場合は異なるのでしょうかけれど、何も生えていない地肌が露わな地面よりも草が生えている地面の方が保温効果があると言えるのではないのでしょうか？

草に土壌凍結防止効果あり？

右の写真は、同じ日、同じ時間帯の「みどりの手」のみなさんが管理しているジロポウエンゴサクの斜面。雪はきれいに解けていました。日がよく当たる落葉樹林の下ということもありますが、地面を覆う野草が土壌の凍結を防いでいるのかもしれない。

一方、城址本丸の様子ですが、同じ草原でも地面の様子は3様に分かります。①画面奥の白い雪の向こう側は雪が完全に解けています。②真ん中の白い帯は、まだ解けていない雪、③手前の木の幹・枝の影があるところでは雪が残っていません。①はいちばん日当たりがよいところ、②は手前のソメイヨシノの枝がつくる日陰のところ、③はそのソメイヨシノの枝に雪がかかって、地面に積もる雪の量が少なかった場所です。

同じ場所でも、条件が異なることによって、様々な環境の違いが表れてくるという見本を見せてくれたのが1/6の降雪でした。



雪後でも、しっかり咲いている花

1/10のモニタリングでは下の写真左からウメの一番咲き、



ウシハコベ、ホトケノザ（閉鎖花）、その他キュウリグサ、カラスノエンドウ、ヒメ

オドリコソウなどが殺風景な景色に彩（いろどり）をつけていました。

***新年2022年1月のモニタリングは1/17、1/31 9:00 ため池公園スタート**

***ニリンソウ自生地保護活動 新年最初の草刈り活動 1/16 10:00 ため池公園梅林下集合**

こちらも参加大歓迎 問合せ先：赤塚公園サービスセンターへ 電話：03-3938-5715